

# 新中国成立以前における中国の社会学に対する 日本の社会学の影響について

星 明

## 〔抄 録〕

中国は1900年前後に社会学を受容して以来、すでに1世紀が経過したが、中国の社会学の発展の初期の一時期、日本の社会学が影響を及ぼした。その影響の1つは1900年前後から1910年代末までの約20年間、Sociologyの訳語である社会学の名称の日本から中国への伝播、日本の社会学書の中国語訳書の刊行、日本への留学生および彼らの帰国後の活躍などであり、他の1つは1930年代から1949年の新中国成立までの日中戦争に起因する中国の社会学団体の活動の停止、その機関誌の停刊および北京や天津にあった大学の雲南への疎開などである。この小論の目的は、中国の社会学に対するこれらの日本の社会学の影響を明らかにすることである。

キーワード 中国社会学, 日本社会学, 社会学史, 群学

## は じ め に

中国にとって社会学は自生の学問ではなく、外来の学問である。これは日本にもあてはまる。ヨーロッパで起こった市民革命が生みだした社会学は半世紀を経て、アジアの日本に、そしてそれからほぼ四半世紀遅れて中国に伝わった。中国が1900年前後に、ヨーロッパおよび日本から社会学を受容して以来、すでに1世紀余りが経過した。中国は、歴史的には、1892年、イギリスとのアヘン戦争に敗れてから、西洋の列強が絶え間なく侵入を続け、国家や民族の存亡の危機があった。また、思想的には、このような危機的状况を救うためには、政治を維新する以外にないと考える人たちがあらわれた。このような、歴史的な情況、そしてそれが生みだした維新思想が、中国で社会学が受容される基本的な条件となった。具体的には、ブルジョア改革派が社会変革のための理論的武器として社会学を輸入した<sup>(1)</sup>。

韓明謨は、「中国の社会学の誕生は、嚴復がスペンサーの『社会学』の1部を翻訳紹介した1895年、またその全訳を『群学肄言』というタイトルで出版した1903年である。社会学が清朝末期に誕生したことは、偶然ではない。当時、中国は帝国列強の侵略下にあり、朝廷や地

位のある人も庶民も、内憂外患で、国は弱く、民は貧しいという状況のもとにあった。このなかで、人びとは愛国的熱情から武装抵抗をするか、あるいは産業を振興するか、またあるいは国家が变法改革を行なうことを要求するなどをはじめ、多くの方法を提案し、実行していた。一部の維新派の知識人たちは積極的に中国の富国強兵の道を追求した。かれらは、西洋の資本主義国家の政治社会の学説を採求し、導入して、そのなかで西洋の資本主義社会の弊害を救うために発展してきた社会学と中国の文化的伝統と結合させた。また、滅亡に瀕した中国を救う処方箋の1つとして優先的に社会学を中国に導入した。したがって、中国の社会学は、中国近代の内憂外患のなかで、その誕生があったといえることができる。中国社会の問題から社会学は生まれたのであるが、西洋の資本主義国家の社会学の影響を相当強く受けている」と述べている<sup>(2)</sup>。

中国の社会学の受容は、清朝末期の19世紀末から20世紀の始めにかけてのことであった。多くの社会学者は、中国の社会学の誕生は、H. スペンサーの社会学を嚴復が翻訳して出版した1903年とする。筆者も、中国の社会学の始まりは翻訳書の普及を根拠にして1900年前後と考え、そして中国社会学の成立は全国規模の中国社会学社が成立した1930年と考えている。1920年代からは、中国の社会学への影響は圧倒的にアメリカが主流になり、それは1948年まで続いた。というのも、1844年にアメリカは中国での布教権を得て、多くの教会立の大学を設立したことによって多くの中国の青年をひきつけ<sup>(3)</sup>、またそれと平行して多くの留学生をひきつけたからである<sup>(4)</sup>。

韓明謨は、その著『社会系統協調論—關於社会發展機理的研究』（2002年）のなかで、1920年代中期から建国直前までの20年間を中国の社会学の進展期とし、そしてその発展の全般的な傾向を専門的なものと非専門的なものの2つに分類している<sup>(5)</sup>。韓によれば、非専門的な社会学の活動とは、1) 中国共産党が革命根拠地で、革命の性格や革命の道筋の問題をより解決しやすくするために、農村社会と小都市や町で行なった社会調査研究、2) 日本の帝国主義勢力が「9・18」を発動し、中国の東北3省を占領し、続いて河北に攻入った当時、中国の知識界で湧き起こった中国社会の性質、中国社会史、中国の農村社会の性質についての論戦、3) 中国農村の解体と農村経済の破産を救うために起こった「郷村建設運動」の3つをさす<sup>(6)</sup>。

本稿では、むしろ専門的な社会学の活動を取りあつかう。韓明謨は専門的な社会学の活動の具体的な内容を「大学と研究組織の社会学の進展」として、1) 学部・学科の設置、2) カリキュラムの設置、3) 学術団体の設置と学会誌の発行、4) 世界の主要な社会学理論の紹介、社会学の各領域の著作の刊行および外国の社会学の名著の中国語訳の刊行をあげている。筆者はこの内容に日本の社会学がどのような影響を与えたかをみる。また、韓明謨が取りあげた事柄について、日本との関係を中心にみる。すなわち、**Sociology** の訳語である社会学の名称の日本から中国への伝播、日本の社会学書の中国語訳書の刊行、日本への留学生およびかれらの

帰国後の活動などである。それに加えて、1930年代から1949年の新中国成立までの日中戦争に起因する中国の社会学団体の活動の停止、その機関誌の停刊および北京や天津にあった大学の雲南への疎開といった、中国の社会学に対する日本のいわば負の影響の側面についても触れたい。

## 1. 群学から社会学へ

社会学という名称を英語の **Sociology** の訳語として、最初に日本語にとり入れたのは外山正一(1848~1900)とも乗竹孝太郎(1860~1909)ともいわれるが、文献からすれば乗竹がスペンサーの『社会学原理』を最初に翻訳出版した1883年(明治16年)である<sup>(7)</sup>。しかし、蔵内数太が述べているように、当初人間学、交際学、世態学などの訳語があり、定訳になるまでには紆余曲折があった<sup>(8)</sup>。これは、**Society** の訳語が社会という用語に定訳されるまでの経過と同じである。独立した諸個人からなる社会は存在せず、あるのは「世の中」、「世間」であった。もちろん、語源的に、ラテン語の **societas** は共同、連帯、仲間、同盟を指すものとして、また中国語の社会の社は土地の神を祭ること、会は人びとの集まりを指すものであり、これらはまさに狭義の社会を指している<sup>(9)</sup>。しかし、社会が観念のなかだけで存在するという考え、あるいは支配層によって不変のものとしてつくられているという考えが否定されて、本来の意味での社会の概念は市民革命後に生まれたのである。

中国では、当時、康有為、梁啓超、嚴復らは **Sociology** に対して、「群学」という訳語をあてた。中国は、当時、人口が多く、かつバラバラであった。群学はまさに、このような中国の滅亡を救い生存をはかり、団結して敵と戦うことを鼓舞させることを意図しており、国家社会の発展を促進すると考えられていた。群学の群という用語は、もともと荀子・王制編のなかの、人間は「力では牛にかなわない。脚力では馬にはかなわない。しかし、その人間が牛や馬を使役できるのはなぜだろうか。人間は社会生活をいとなむが、牛や馬には社会生活がないからだ。なぜ人間は、社会生活をいとなむことができるか。人間には社会秩序があるからだ。なぜ人間には社会秩序があるか。礼・義があるからだ。つまり、礼・義にしたがって社会秩序が定まるから、人びとは和合する。和合すれば団結が生まれ、団結すれば力が増す。力が増せば強くなり、強くなるから何にでも勝つことができる……。人間は先天的に社会生活をいとなむようにできている。とはいえ、社会に秩序が欠けていれば、争いが起こる。争いが起これば社会は乱れる。社会が乱れれば人びとはバラバラになる。バラバラになれば力は弱まる。力が弱くては、何にも勝つことができない」<sup>(10)</sup>という考えに由来している。人が、もし集団となつて互いに助け合うことができなければ、また団結できなければ、人は禽獣と何違わなくなるという。康有為、梁啓超、嚴復らは群学を、民衆を組織、団結、教育する学問とみなした<sup>(11)</sup>。

このような歴史的状況のなかで、嚴復は古代の哲学者のことばのなかから、群という訳語を

探しだした。しかし、新しく中国に導入した **Sociology** に対して、古典を出典とする用語を当てたことは時代の思潮にマッチしなかったのである。このことを、黄紹倫は「群学という名称を選ぶなかで、嚴復は日本語の『社会』が **Society** を意味することを知っていた。しかし、かれは『社会』という用語はより一般的な群ないし集合体という概念に含ませるべきだと考えた。つまり『人間の集合体にはいくつかの形態がある。社会は規範（法）によって統治された1つの集合体である。……共通の目標と願望をもって人びとが集まり、組織をつくるとき、それは社会と呼ばれる』。しかし、用語の選択のなかでこのような精密な概念区分と注意も世に忘れられていくことから群学という用語を守れなかった。一般に広まり、標準的な訳語になったのは『社会学』であった。恐らく、これは当時の気分の反映であった。中国全土に知れ渡った戦勝をしたばかりの日本は、多くの中国人から新たな模倣のモデルとみなされた。また、比較的安い運賃に恵まれて日本に群れをなして行き、大量の日本語の借用語を持ち帰った。ある概算によれば、近代中国の語彙に入ってきたすべての外国のことばのなかの半分以上が日本から取り入れられたという。同時に、伝統的な学問は大多数の中国青年によって、現代の時代に合わないといなされた。そして『群学』もあまりに古典の響があるので、流行しなかった」<sup>(12)</sup>と述べている。

後の新中国の建設の時にはソ連が中国の見本になったが、当時は日本がモデルになった。19世紀中葉から末にかけて、中国は悉く外国との戦争に敗れた。第1次アヘン戦争（1840～42年）、第2次アヘン戦争（1856～60年）、中仏戦争（1884年）、日清戦争（1894年）のすべてに敗れた中国には、列強によって領土分割すらもされかねないという危機があった。この間、太平天国（1851～1864年）の乱という被支配者からの異議申し立ては清国政府をゆさぶった。また、義和団（1900年）の外国人に対する排外運動の失敗は、中国の主権すら脅かされるという大きな負債を背負った。このような国家の危機的状況を救うのは維新しかなく、維新をしようとするれば外国に学ぶ必要があった。

ここで1つのモデルになったのが日本である。康有為が光緒帝にあてた上書とともに献上した4冊の本のなかには自著『日本変政考』もあった。その序のなかで康有為は「日本は欧米に学び、30年で成功を得た。中国は土地も広く、人口も多いので、もし近くの日本に学べば、10年以内で世界に知られる強国になる」と述べている<sup>(13)</sup>。貝塚茂樹はいう「当時の中国の革新論者は康有為から黄興にいたるまで、多少のちがいはあっても、日本の明治維新をモデルとして、憲法を制定し、民主主義政府をつくり、近代化をすすめることをめざしていた。清末政府は科举制度を廃止して、学校をたてて、まず近代化にあたる人材を養成するため、海外に多くの留学生を送った。中国に近く、しかも近代化のモデルと考えられていた日本には多数の留学生が殺到し、その当時、東京には8千人をこえる中華学生が滞留していたといわれる」<sup>(14)</sup>と。また、韓明謨も「日本は明治維新後、欧米を目指して努力し、非常に大きな成果を得た。中国の革命的進歩人も志をもつ青年も続々と日本にわたり、革命の真理と富国強兵の手

腕を学んだ。……日本は中国からも近く、清朝政府に反対する革命家たちにとってもっとも近い逃げ場所であった。同時に、留学の費用も安くすんだ」という<sup>(15)</sup>。救国のみちを外国にもとめたこと、明治維新を行なった日本をモデルにしたことから、また現実的には同じ漢字を使い、経費も安く行ける日本から学問や思想が中国に伝わった。

黄紹倫は、中国の「社会学の登場は新たな中国の知識人の人たち、すなわち海外で学んだ学生を待たねばならなかった。この人たちは2つの大きなグループ、つまり日本で教育を受けた東洋派と欧米で教育を受けた西洋派に分類できる。両派は同時に社会学を携えて帰国したが、それぞれ異なっていた。東洋派では、章炳麟が1902年の訳のなかで、**Sociology** に対してはじめて日本語の「社会学」という用語を使用した。その後の中国語訳書では、ギディングスの著作の日本語訳版から呉健常が1903年に再翻訳したものや欧陽鈞が日本の遠藤隆吉教授の講演と著述を編集したものがある。西洋派を代表する嚴復は「群学」(文字どおり、集合体の研究)という術語を新たに造り、1903年に出版したスペンサーの『社会学研究』の全訳本のタイトルにこの術語を使った」としている<sup>(16)</sup>。しかし、時代の思潮は群学ではなく、むしろ社会学という用語を選択した。日本語の名称である社会学はこのようにして、中国に伝わり、定着していったのである(社会学の名称は定着したが、社会学への影響は10数年に過ぎない)。1909年設立の庚子賠償奨学金(庚款奨学金)による庚款留学によって、中国人留学生の主流はアメリカに吸収されていくことになる。もちろん、日本側にも中国人留学生を帰国させしめた要因があった。1つは、1905年清国政府の要請を受けて日本政府が公布した「清国留学生取締規則」による進歩的学生の帰国(帰国者2千名)である。これは当時の中国人留学生8千名の25%にあたる<sup>(17)</sup>。他の1つは、1919年の「日中軍事共同防敵協定」に反対する多数の学生の帰国である<sup>(18)</sup>。

## 2. 翻訳書の刊行

1898年から1903年にかけて、中国の知識界は西洋の民主主義の学説紹介のブームであった。ルソーの『社会契約論』(中江兆民訳)が戢元丞・楊廷棟・楊蔭杭・雷奮らによってはじめて中国語に訳されたのを始め、モンテスキューの『法的精神』が張相文<sup>(19)</sup>によって日本語訳から転訳された。また、ミルの『自由論』、スペンサー、ベーコン他2, 3冊が翻訳されている。革命史の著作は19冊のうち12冊までが日本語から訳されている<sup>(20)</sup>。このように民主主義学説の主要なものは、日本で学んだ中国人留学生によって翻訳、紹介された。1902年から始まった社会学書の翻訳、紹介もまったく同じ状況であった。楊雅彬も「……辛亥革命(1911年)以前は、嚴復が直接ヨーロッパの社会学を紹介したことを除けば、その他の社会学の本はすべて日本語から訳されたものであった……」という<sup>(21)</sup>。

中国は日本経由で、西洋の社会学の著作を取り入れることが一時流行した。その理由は上で

述べたが、一口でいえば、中国を救う道筋を外国にもとめたこと、とくに明治維新を行なった日本をモデルにしたことから、また現実的には同じ漢字を使い、近くて費用が安く行ける日本から学問や思想が中国に伝わったのである。

欧陽鈞は、遠藤隆吉の『社会学』（1901年）を1911年に訳した。当時、日本の社会学の多くの著作が中国で翻訳出版されたが（表2の1 日本の社会学著作の中国語訳を参照）、韓明謨は「……しかし、もっとも称賛を得たのはやはり1911年、欧陽鈞編訳の『社会学』である。この本は遠藤隆吉が行なった社会学の講義をもとにして、遠藤のその他の著作を参照して作られたものである。13章からなるこの本は、心理学派の考えをもとに書かれており、従来の社会進化論、つまり生物学派の学説に比べて一步進んでいる。議論は既に相当要点をついたものであった。同時に、この本は社会学の研究方法のうえでも、比較的全面的で新鮮な論点をもっていた。この本のなかであげられている研究方法は経験観察、単位研究、悉皆調査、抽象研究、総合の五つである。現在の研究方法の面接法（訪問法）、事例研究法（個案研究）、センサス（普查）、帰納法、総合などの方法の概要を紹介している。それゆえ、社会学の老大家楊堃はこの訳書を『当時広く思想界に及ぼした影響は、嚴復の『群学肄言』に比べて、勝るとも劣らない』といった」と述べている<sup>(22)</sup>。

ここでは、中国が翻訳刊行した社会学書のうち、日本書からのものを次表にあげておきたい。

表2の1 日本の社会学著作の中国語訳

著者／訳者	原 題／訳書名	発行所	発行年
岸本能武太	社会学	大日本図書	1900
章太炎	社会学	広智書局	1902
有賀長雄	族制進化論	牧野書房	1884
訳者名なし	族制進化論	上海広智書局	1902
有賀長雄	人群進化論	広智書局	1903
麦仲華			
Giddings, F. H	<i>The Theory of Socialization</i>		1897
市川源三	社会学提綱	普及社	1901
呉建常	社会学提綱		1903
遠藤隆吉	社会学	哲学館	1901
欧陽鈞	社会学		1911
遠藤隆吉	近世社会学	成美堂	1907
賈寿公	近世社会学	泰東図書局	1920
建部遯吾	理論普通社会学綱領	金港堂	1904
湯一鶚	普通理論社会学綱領		1907
訳者名なし	社会学	上海作新社	1903
訳者名なし	社会学原理	上海国民日報掲載	1903
加田哲二	社会学概論	慶応義塾出版局	1928
劉叔琴	社会学概論	開明書局	1930
加田哲二	独逸社会経済史	章華社	1934
徐漢臣	德国社会経済史	商務印書館	1936
加田哲二	独逸経済思想史	改造社	1931
周承福	德意経済思想史	神州国光社	1932
加田哲二・橋本勝彦			
徐淵若	蘇聯経済概論	申報	1934
加田哲二	近世社会学成立史	岩波書店	1928
李培天	近世社会学成立史	啓智書局	1929

高田保馬 杜季光 高田保馬 杜季光 高田保馬 伍紹垣	社会学総論 社会学総論 社会構成論 社会学概論	岩波書店 商務印書館 商務印書館 華通書局	1922 1930 1931 1931
鈴木栄太郎 韓雲波	農村社会学史 農村社会学史	刀江書院 正中書局	1933 1944
米田庄太郎 林肇民 米田庄太郎 王璧如	都市論 現代文化概論 現代文化論	新生命書局 弘文堂書房 北新書局	1931 1924 1929
関榮吉 張資平, 楊逸棠 吳鳳声, 張星海	文化社会学概論 文化社会学 文化社会学	東京堂 樂群書店 中日文化協會	1929 1930 1941
Tönnies, F. 波多野鼎 楊玉宇 波多野鼎 徐文亮 波多野鼎 劉侃元 波多野鼎 楊浴泉 波多野鼎 楊及玄 波多野鼎 彭迪先	<i>Gemeinschaft und Gesellschaft</i> 共同社会与利益社会 近世社会思想史 社会政策原理 社会思想史概論 正統学派的價值学説 現代経済学論	太平洋書局 開明書店 大江書鋪 北新書局 商務印書館 商務印書館	1887 1928 1930 1929 1934 1936
新明正道 袁業裕 新明正道 雷通群	国民革命之社会学 群集社会学 群集社会学	商務印書館 ロゴス書院 新宇宙書店	1938 1929 1930
那須浩 劉 鈞	農村問題与社会思想	神州国光社	1930

出所：孫本文，1948年、『当代中国社会学』，勝利出版公司，付録。韓明謨，1987年、『中国社会学史』，天津人民出版社，37ページ。楊雅彬，1987年、『中国社会学史』，山東人民出版社，27ページ。日本国会図書館および中国上海図書館所蔵図書館の検索などから作成。

### 3. 留 学 生

日本への中国人留学生の流れについて理由は、すでに述べたところであるが、その数の推移と背景について、狭間直樹は次のように記している。「……留学生派遣の本格的な開始は、したがって、日清戦争後の変法運動期をまたねばならなかった。このときには、欧米諸国とともに日本も派遣対象にされるのだが、距離が近く、文字が同じという便宜があり、経費も安い日本留学がすくなくとも量的には圧倒的な比重を占めることになる。日本留学の最初は1896年のことである。その年はわずかに13人であったのが、しだいにふえて1899年には200人をこえる。西太后新政では学堂制度の確立はもっとも重要な看板のひとつだったが、いうまでもなく教師が決定的に不足していた。応急の策として留学が、それも日本への留学が推進された。その結果、1901年の280人が、翌02年には約500人、03年には約1000人、04年には1300人にもものぼることになった。これだけでも相当の数だったが、科学廃止の翌05年には

新中国成立以前における中国の社会学に対する日本の社会学の影響について（星 明）

なんと 8000 人以上と推定されるほどの激増をみたのである」と<sup>(23)</sup>。

ここでは、孫本文による 1947 年 12 月の調査、中国社会学社（1928 年上海で成立した東南社会学会を全国規模に発展させたもの）の学会誌『社会学刊』、中国社会学会（余天休が創設）の『社会学雑誌』から日本留学者のリストをつぎのように作成した。

表 2 の 2 日本に留学した中国各大学社会学教授（1947 年 12 月現在）

姓 名	本籍（籍貫）	勤務大学	留学先
1 王 克		社会教育学院	
2 李劍華	四川	前復旦大学	日本大学
3 岑家梧	広東	中山大学	
4 康宝忠	陝西	前北京大学	早稲田大学
5 劉 藻	広東	中山大学	
6 劉及辰	河北	社会教育学院	
7 鄧深澤	湖南	前中央大学	
8 簡貫三	河南	前河南大学	
9 鄺炯燊	広東	貴州大学	
10 魏重慶	浙江	輔仁大学	

出所：孫本文『当代中国社会学』、1948 年、勝利出版公司、pp. 319～327 をもとにして中国社会学会『社会学雑誌』(The Chinese Journal of Sociology)、東南社会学会（1930 年から中国社会学社）『社会学刊』(The Sociological Journal) の各年度版から作表。

中国の社会学への日本の影響を示す 1 つの指標になるので、かれらの中国への帰国後の社会学に関する研究活動をみておこう。資料は、1922 年創刊の中国社会学会編『社会学雑誌』(The Chinese Journal of Sociology, CJS と略す)、および 1929 年創刊の東南社会学会編（1930 年から中国社会学社）『社会学刊』(The Sociological Journal, SJ と略す) である。ただ 2 つの雑誌とも、1909 年から始まった庚子留学でアメリカに留学した帰国者が中心になって活躍している。すでに留学者の流れは、日本からアメリカ、フランス、イギリスに移っていた。

1. 王克『中国社会服務事業』（1943 年、商務印書館）。

2. 李劍華『労働問題与労働法』（1928 年、太平洋書局）、『社会学史綱』（1930 年、上海世界書局）、『社会事業』（1931 年、世界書局）、『犯罪学』（1932 年、法学編訳社）、『非常時期之社会政策』（1937 年、中華書局）、『監獄学』（1936 年、中華書局）、『劳工法論』（1933 年、法学編訳社）「社会学在科学上的地位」(SJ, vol. 1, no. 1, 1929)、「{書評} 社会学 ABC（孫本文）」(SJ, vol. 1, no. 1, 1929)、「社会学体系論」(SJ, vol. 1, no. 2, 1929)、「孔徳 {コント} 的生平及其学説」(SJ, vol. 1, no. 3, 1930)、「{書評} 許徳珩の社会学方法論」(SJ, vol. 1, no. 4, 1930)、「{書評} 崔載陽の近世六大家社会学」(SJ, vol. 2, no. 1, 1930)、「{書評} 林惠祥編 台湾番族之原始生活」(SJ, vol. 2, no. 3, 1930)、「{書評} 浅野研眞著 社会現象の宗教」(SJ, vol. 2, no. 3, 1930)、「{書評} 川辺喜三郎の社会学原論」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931)、「{書評} 川辺喜三郎の社会学概説」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931)、「{翻訳} 霍布浩斯 {Leonard Hobhouse} の社会学説」{松本潤一郎著『現代社会学説研究』（1928 年）からの訳} (SJ, vol. 2, no. 1, 1930)、「奢侈生活之社会学的觀察」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931)。



3. 岑家梧「唐代婦女裝飾風俗考」(SJ, vol. 6, 合刊, 1948), 『芸術社会学』(出版年, 出版社ともに不明)『史前史概論』(1940年, 商務印書館), 『図騰芸術史』(1977, 商務印書館), 『中国原始社会史稿』(1984年, 民族出版社), 『図騰芸術史 始祖の誕生と図騰』(1988年, 上海文芸出版社), 『中国芸術論集』(1991年, 上海書店)。

4. 康宝忠「倫理学」「社会学講義」「社会政策」「植民政策」「中国法制史」「逵君講演録」「膠居詩存」(これは, 木橋, 「中国の第一位社会学家——康宝忠, 中国社会科学院社会学研究所編『社会学研究』, 1989年3月, 10ページを参照した)。

5. 劉蕓「美国社会学雑誌5月号要目紹介」(SJ, vol. 1, no. 2, 1929), 「美国社会学雑誌7月号要目紹介」(SJ, vol. 1, no. 2, 1929), 「外国社会学雑誌要目紹介」(SJ, vol. 2, no. 1, 1930), 「美国社会学雑誌最近要目紹介」(SJ, vol. 2, no. 1, 1930), 「社会学之対象及其範圍」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931), 「{書評} 涂爾幹 {デュルケム} 的社会学方法論」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931), 「美国各種社会学雑誌内容紹介」(SJ, vol. 2, no. 4, 1931), 「齊穆爾 (G.Simmel) 之社会学学説及其批評」(SJ, vol. 3, no. 3, 1933), 「{書評} 亜貝爾 {アベル} 的德国系統社会学」(SJ, vol. 3, no. 3, 1933), 「{書評} 顏復礼・高承祖編の広西凌雲猿人調査報告」(SJ, vol. 3, no. 3, 1933), 「{書評} 楊成志著雲南民族調査報告」(SJ, vol. 3, no. 3, 1933), 「{雑誌紹介} 社会的勢力 {vol. 10, no. 1, 1931}」(SJ, vol. 3, no. 3, 1933)。

6. 劉及辰『科学的経済学方法論』(1936年, 時代文化社), 『近代資本主義経済思潮批判』(1939年, 生活書店), 『先秦諸子の思想方法与思想体系』(1951年, 新潮書店), 『政治経済学的研究対象和方法』(1951年, 十月出版社), 『西田哲学』(1963年, 商務印書館), 『京都学派哲学』(1933年, 光明日報出版社)。

7. 鄧深澤『社会学要論』(1932年, 新京書店)。

8. 簡貫三『理論社会学』(1935年, 中華書局), 『工業化与社会建設』(1946年, 中華書局)。

9. 鄭炯燊

10. 魏重慶『社会学小史』(1940年, 商務印書館), 藤田豊八, 童振福との共著『宋代之市舶与市舶条例』(1936年, 商務印書館)。

## 4. 日中戦争の中国の社会学への影響

### 4.1 大学の移動

1931年9月18日の柳条湖事件に始まって, 1937年7月7日の盧溝橋事件を契機とする日中の全面戦争は北京の北京大学, 清華大学, 天津の南開大学を, 湖南省長沙(国立長沙臨時大学を設置)を経て雲南省昆明(国立西南連合大学を設置)に移動せざるを得ない状況をつくった。国立西南連合大学歴史簡介(インターネット版)によれば「1937年の『七・七』盧溝橋事件から間もなく, 北京, 南京が日本に占領された。北京大学, 清華大学, 南開大学は追いつ

新中国成立以前における中国の社会学に対する日本の社会学の影響について（星 明）

められて長沙に逃れ、そこで長沙臨時大学（略称：臨大）をつくったが、長くは続かなかった。12月13日、南京が陥落して、武漢を揺るがした。戦禍が長沙に及ぶ危険があったので、臨大は再び、昆明に移動することを決定した」とある<sup>(24)</sup>。この西南連合大学以外にも、「四川省の重慶へは中央大学社会学部、復旦大学社会学部、郷村建設学院社会学部、社会教育学院社会事業行政系が、成都へは金陵大学社会学部、金陵女子文理学院社会学部、齐鲁大学歴史社会学部、燕京大学社会学部が移動している」のである<sup>(25)</sup>。

#### 4.2 学会活動の停止と雑誌刊行の停止

日中戦争は、その他にも全国規模の学会である中国社会学社（最初1928年に東南社会学会として上海で成立）の活動を停止させた。1937年1月、中国社会学社は第6回年次大会を開催した。しかし、その後は日中戦争のために年次大会は1937年1月から1943年2月まで6年間中断し、第7回大会は1943年2月になって開催された。しかも、重慶、成都、昆明の3ヵ所での同時開催という変則的な形であった<sup>(26)</sup>。この学会が発行していた1929年創刊の学術誌も第1巻1期から第5巻2期まで刊行されたが、やはり日中戦争のために停刊に追い込まれた（1948年1月、第6巻合巻として復刊されたが、それが最後になった<sup>(27)</sup>）。また、1927年創刊の燕京大学社会学会発行の『社会学界』も、1938年6月刊行の10巻で停刊に追い込まれたのである。

### お わ り に

本稿では、新中国成立前の中国の社会学に対する日本の社会学の影響を取りあげた。外来の学問が独り立ちするには、つまり「中国の社会学」から「中国社会学」になるには、約30年の期間が必要なのではないか。そのように筆者は考えている。この独り立ちの初期に、日本は中国の社会学に本稿で取りあげたような影響を与えたのである。それには、プラスの面とマイナス面の影響があった。

なお、資料として中国社会学史年譜（1891年～1957年）を掲載したが、これは本文に記述した内容の理解を助けるためである。

#### 資料1 中国社会学史年譜（1891年～1957年）

1891年 康有為（1858～1927）が広州長興里の万木草堂に長興学舎を創設し、「群学」を講ずる。

1896年 譚嗣同（1865～1898）が『仁学』を著し、そのなかで社会学の名称が初めて提出される。

1902年 章炳麟（太炎）（1869～1936）が日本の岸本能武太の『社会学』を翻訳出版する。これは外国の社会学の著作が訳された最初のものである。上海広智書局出版。

1903年 嚴復（1854～1921）が、イギリスのH・スペンサーの *The Study of Sociology* を翻訳出版する。書名は『群学肄言』。これは西洋の社会学が直接翻訳出版された最初の本である。当時、広い範

困に著しい影響を与えた。上海文明翻訳局出版。

- 1906年 「京師法政学堂章程」のなかに、政科政治門が社会学課程を設置したとある。これは中国の大学に社会学課程を設けたという最も早い記録である。しかし、実際にはもっと以前に開講されていたかもしれないが、わからない。
- 1908年 上海聖約翰大学(St. John's University)に最初に社会学課程が設置される。アメリカ人 Arthur Monn(孟)が講義を担当する。
- 1913年 上海滬江大学(Shanghai College)に最初に社会学部(社会学系)が設置される。アメリカのブラウン大学(勃朗大学)から派遣された教師 J. A. Dealey, Daniel Harrison Kulp II, H. S. Bucklin が講義をする(Wong Siu-lun, 1979, p. 11)。
- 1913年 11月。北京に「北京社会実進会」が成立。これは北京キリスト教青年会に属する団体で、メンバーは大学生、高校生の約200名であり、社会福祉事業に従事する最初の青年組織である。この会は『新社会』(旬刊)を編纂出版する。
- 1915年 陶孟和と梁寧皋が共著で、*Village and Town Life in China* (『中国農村と都市生活』)を出版。これは中国人自身による社会学の著作の最初のものである。これは、英文で発表され、ロンドン経済政治学院の経済政治叢書『社会学専刊』の第4種である。
- 1915年 李大釗が1915年5月、11月に雑誌『新青年』(第6巻第5、6号)に「我的馬克思主義觀」を発表。1920年、『史学思想史講義』の中に「馬克思的歴史哲学」を掲載。これはマルクス主義を系統的に紹介したものであって、かれは「唯物史觀は、また史的唯物論ともいう。これは社会学においても、1種の理想的な運動を表している」と考えた。これは当時の普遍的な認識を代表している。つまり、社会学は史的唯物論と同じだという認識である。
- 1916年 北京大学で康宝忠によって、はじめて社会学が講義される。これは中国自らの大学で、中国人の教授による、最初の社会学の講義である。
- 1918年 陳長蘅が『中国人口論』(商務版)を著す。これは中国で最も早く、中国の人口を論じたものである。
- 1921年 厦門大学に歴史社会学部が設置される。これは中国自らの大学で、最も早い社会学部の設置である。
- 1921年 1918~9年、アメリカの Sydney D. Gamble(甘溥)と燕京大学の John Stewart Burgess(歩濟時)が、アメリカの春田社会調査に準拠して、北京で社会調査を展開した。1921年、アメリカで *Peking: A Social Survey* (『北京——一種社会調査』)を出版。これは大学の社会学部における都市調査の発端になった。
- 1922年 2月 余天休が北京で「中国社会学会」を結成し、同時に『社会学雑誌』を創刊。これは中国で社会学という名前をもつ最初の学術団体であり、最初の学術雑誌である。
- 1923年 6月 上海大学に社会学部が設置される。学部長に瞿秋白が任じられる。共産党が大学のなかで社会学部を設置して、革命青年を養成するはじめての試みである。秦博古、張琴秋、楊尚昆、陽翰笙など党の指導者を養成した。王明もこの大学で聴講したことがある。1927年5月、国民党により閉鎖される。
- 1924年 中国国民党中央農民部が、広州で前後して6回農民運動講習班を設け、多くの農民運動の人材を養成する。毛沢東、周恩来などが前後して教えた。実際の革命闘争に育まれて、マルクス主義社会学の水準を高めた。
- 1924年 中華教育文化基金理事会在北京で成立する。この会の調査部は陶孟和、李景漢が責任者になった。1926年、北平社会調査所と改名。前後して、20種余りの調査研究報告を出版する。そのなかでも李景漢の『北平郊外之農村家庭』は、農村調査の比較的早期の成果である。
- 1925年 上海滬江大学教授 Daniel H. Kulp II(葛学博)が、学生を指導し、広東潮州鳳凰村を調査し、1925年、アメリカで *Country Life in South China* (『華南農村生活』)を出版。これは農村調査の

もう1つの比較的早期の成果である。

- 1926年 名義上は中国国民党中央執行委員会農民部だが中国共産党の指導のもとで、1920年1月、『中国農民』（雑誌）を創刊。創刊号には、毛沢東の「中国農民の各階級の分析とその革命的態度について」、第2号には「中国社会各階級の分析」が掲載された。これはマルクス主義の観点から中国農村の階級状況を分析した最初の著作である。
- 1926年 李達が『現代社会学』を出版。これはわが国の学者が初めてマルクス主義の観点から書いたという点で大きな意味をもつ社会学の著作である。しかし、わが国の初期の共産主義者が避けられなかった、理論上の未成熟さを残している。
- 1927年 1～2月。毛沢東が湖南長沙、醴陵、湘潭、衡山、湘郷の5県で農民運動の状況について32日間調査を行ない、農民運動の発展のために輝かしい『湖南農民運動考察報告』を書く。これは堅実な理論的基礎を固めたものである。
- 1927年 燕京大学社会学部が6月に『社会学界』（年刊）を創刊する。これは全部で10巻になった。この刊行は燕京大学の中国の社会学界における学術レベルと歴史的な地位を示した。
- 1928年 9月。孫本文の発起によって「東南社会学社」が成立し、のちに『社会学刊』（季刊）を出版（1929年7月創刊）。
- 1928年～1936年 数年間、中国文化思想界は相次いで3回の学術論戦をまき起こした。これがつまり中国社会の性質に関する論戦、中国の社会史に関する論戦および中国の農村社会の性質に関する論戦である。この3回の論戦は中国社会学の成長にとって、中国革命の実践にとって、また広大な知識青年の革命理論知識にとっても積極的な促進作用をなした。
- 1929年 7月 東南社会学社が『社会学刊』（季刊）を創刊。
- 1930年 1922年から、金陵大学アメリカ籍教授 J. L. Buck（ト凱）が学生を指導して行なった中国農村経済と社会状況の調査を基にして、1930年に英文の *Chinese Farm Economy*（『中国農場経済』）を出版した。これは中国農村経済を研究した代表作であり、中国農村経済の研究を開くにあたって、重大な影響をもっている。
- 1930年 陶孟和が『北平生活費的分析』（商務版）を出版。この本は家庭記帳法を用いて家庭生活の調査を行なった最初の本である。
- 1930年 燕京大学が英文で *Ching Ho: A Sociological Analysis*（『清河鎮社会調査』）を出版。これは大学が行なった小都市調査の最初の報告書になった。
- 1930年、5月。毛沢東が『反対本本主義』（書物に出ていることは何でも正しいとする考え方、態度に反対する）を書く。これは調査研究の基本知識、調査研究と中国革命の関係、調査研究の目的および技術に対して理論的なものから実際的なものにいたるすでに完成した思想からなっていた。これはマルクス主義による調査研究の最初のかつ最も良い教科書である。
- 1930年 全国的な中国社会学社が成立。もと東南社会学社が出版していた『社会学刊』（季刊）を中国社会学社が引き継ぐ。この刊行物は5巻2号まで出版されたが、抗日戦争が起こったために停刊になった。1948年1月、6巻合刊として復刊したが、それが最終刊になった。
- 1930年 この年5月、毛沢東が江西尋烏で大規模な調査を行なって、8万字からなる『尋烏調査』報告を書いた。この調査は農村を調査したのみならず、尋烏の県城（県政府所在地）も調査した。
- 1930～1938年 晏陽初が河北正定で平民教育の実験区を設立し、かれの「平民教育をもって農村建設を進める、民族が自らを救う基礎となす」という理論を実験した。
- 1931～1935年 梁漱溟が山東鄒平で山東鄉村建設研究所をつくり、その「中国の建設は郷村を建設する道程をたどらなければならない、農業を振興しなければならない。もって、工業を引き起こす道とする」という理論を実験した。
- 1933年 李景漢が『定県社会概況調査』を出版。これは調査研究の方法において比較的成功しており、1つの県区の詳細な調査書である。以来、多くの調査がこの本をモデルにした。

- 1933年 陳翰笙が英文の *The Present Agrarian Problem in China* (『現今中国之土地問題』) を出版。これは陳がマルクス主義を指導として農村調査を行なった代表作である。
- 1934年 陳達が『人口問題』(商務印書館版) を出版。陳は解放前の中国の人口研究の最も著名な権威である。これはかれの1つの代表作であり、もう1つの代表作は1946年出版の『当代中国人口』(英語版はシカゴ大学から出版された) である。
- 1935年 孫本文が『社会学原理』(商務印書館版) を出版。孫本文は解放前のわが国の社会学界に最も影響を与えた社会学者であり、最も多い著作をもつ社会学者でもある。この本は孫の代表作であるのみならず、30年代から40年代まで中国の大学の社会学における理論上の代表作でもある。
- 1937年 李達が40万字余りからなる『社会学大綱』(上海筆耕書店) を出版。これは李達が上海や北京の各大学で相次いで講義して蓄積した資料からなっている。毛沢東はこの書を「中国人自身が書いた最初のマルクス主義哲学の教科書」と称賛した。
- 1938年 国民党教育部が大学のカリキュラムを公布し、社会学を文・理・法・師範の4つの大学のための社会科学の共通の必修科目の1つと規定した。
- 1939~1946年 陳達教授の主宰で、雲南昆明郊外の呈貢県に清華大学国情調査研究所を設けた。ここは人口センサス(普查)を進める実験研究の著名な研究機構である。
- 1939年 呉文藻、続いて費孝通の主宰で、雲南大学社会学研究室が成立。これはコミュニティ(社区)研究の方法で、社会学の調査研究を行なう著名な研究機構である。
- 1941年 この年の8月1日中国共産党中央は「調査研究に関する決定」を行ない、党中央および解放区が調査研究機構を設けることを要求した。これによって調査研究のブームが起こった。有名な『米脂県楊家溝調査』もこの決定の後のものである。これは陝北農村地主経済に対して行なわれた調査の報告である。
- 1942年 李安宅、林耀華の主宰で華西大学辺疆研究所を組織した。川西、陝西の少数民族地区の調査を深く掘り下げ、とくに勝れた成果を収めた。
- 1944年 国民党教育部が大学の社会学部のカリキュラム表を立案し、必修科目15、選択科目18、社会学行政組選択科目18を規定した。
- 1950年 教育部が「大学カリキュラム改革委員会」を設けた。公布された「大学、専門学校、文・法学校各学部カリキュラム暫定規定」のなかで、社会学部は「政府および関係部間(内務部、労働部、民族事務委員会など)の工作幹部ならびに中等以上の教師」を養成するもの、また社会学は理論、民族、内務、労働の4組の必修科を設けるように規定された。これは教育改革のはじめをなすものである。
- 1952年 12月 教育部が総合大学に対して調整を行なった。この調整を通じて、社会学部をもつ大学は中山大学と雲南大学の2つだけになってしまった。
- 1953年 教育部が第3次の大学調整を行なった。僅かに残った中山大学と雲南大学の社会学部も別の大学あるいは別の専攻に併合されてしまった。これをもって、社会学の教育および科学研究は大学において完全に活動を停止してしまった。
- 1957年 陳達教授は中央宣伝部や中国哲学社会科学部の招聘に応じて、人口問題を研究する機構を作ることや計画出産の人口政策を実施する問題の座談会を組織した。反右派闘争開始後、この人口問題座談会に参加した人は全員右派にされてしまった。これから人口問題と社会学は研究の禁止区域になった。

〔注〕

- (1) 星明, 1995年, 『中国と台湾の社会学史』, 行路社, 「はじめに」参照。
- (2) 韓明謨, 2002年, 『社会系統協調論—關於社会發展機理的研究』, 天津人民出版社, 1~2ページ。
- (3) 楊雅彬, 1987年, 『中国社会学史』, 山東人民出版社, 29~30ページ。

- (4) 孫本文の「中国各大学社会学教授姓氏録」によれば、1947年12月当時、中国の各大学の総計145名の講師以上のうち、アメリカ留学は74名、フランス留学は11名、日本留学は10名、イギリス留学は9名、ドイツ留学は4名、ベルギー留学は1名、留学無経験者28名そしてアメリカ人8名であった。孫本文、1948年、『当代中国社会学』、勝利出版公司、319～327ページ参照。
- (5) 韓明謨、2002年、前掲書、6～10ページ。
- (6) 韓明謨、1987年、『中国社会学史』、天津人民出版社。星明訳、2005年、『中国社会学史』、行路社の第5章「革命根拠地と解放区の社会調査」、第6章「中国社会の性質の問題、中国社会学史、中国農村社会の性質についての論戦」、第10章「郷村建設運動」を参照のこと。
- (7) 横山寧夫、1981年、『増補 社会学史概説』（増補4版）、慶応通信、281ページ。横山は『社会学』の用語は明治15年に乗竹孝太郎がスペンサーの *sociology* の訳語に当てたのが最初であるといわれている」という。
- (8) 蔵内数太、1966年、『社会学』（増補版）、培風館、9ページ。
- (9) 富永健一、1986年、『社会学原理』、岩波書店、5～6ページ。
- (10) 荀子・王制編、杉本達夫訳、1996年、『荀子』（中国の思想4）、徳間書店、88ページ。
- (11) 韓明謨、1987年、前掲書、32ページ。
- (12) Wong, Siu-lun（黄紹倫）、1979, *Sociology and Socialism in Contemporary China*, RKP, pp. 5～6. および黄紹倫、1992年、「社会学的中国化」、李明堃・黄紹倫主編『社会学新論』、商務印書館、59～60ページ。
- (13) 楊雅彬、1987年、前掲書、3ページ。
- (14) 貝塚茂樹、1970年、『中国の歴史』（下）、岩波新書、154ページ。
- (15) 韓明謨、1987年、前掲書、37～38ページ。
- (16) Wong, Sin-lum, 1979, 前掲書、5ページ。
- (17) 留学生の数については、黄尊三著、さねとうけいしゅう（実藤恵秀）・佐藤三郎訳、1985年、『清国人日本留学日記』、東方書店、16ページおよび小島淑男、1989年、『留日学生の辛亥革命』、青木書店、13ページ。
- (18) 貝塚茂樹、1970年、前掲書、157ページ。小野信爾『人民中国への道』、1977年、講談社現代新書、105～106ページ。
- (19) 張相文（1867～1933）は日本への留学生ではないが、1899年から上海南洋公学師範学校に勤務していた時に、同校の日本語教師栗林孝太郎から日本語を学んだ（熊月之、1986年、『中国近代民主思想史』、上海人民出版社、309ページ）。
- (20) 熊月之、1986年、同上、302～318ページ。
- (21) 楊雅彬、1987年、前掲書、28ページ。
- (22) 韓明謨、1987年、前掲書、37ページ。
- (23) 狭間直樹、1976年、『中国社会主义の黎明』、岩波書店（岩波新書）、39ページ。黄尊三著、さねとうけいしゅう（実藤恵秀）・佐藤三郎訳、1985年、前掲書、16ページ。
- (24) なお、西南連合大学の歴史と活動については、今ではインターネットから多くの情報を得ることができる。それらから得た内容を整理すると次のようである。1931年9月18日の柳条湖事件（9・18事変）にはじまる日本の中国侵略は、1937年7月7日、北平（北京）の西南で起こった盧溝橋事件を契機に、日中全面戦争段階に突入する。1937年7月11日、日本は関東軍、朝鮮軍、及び日本本土からの部隊派遣を決定。1937年7月28日、日本軍は中国軍に総攻撃を開始し、北平（北京）、天津地域を占領。1937年末までに日本軍は北平、天津や河北、山東など含めた地域を占領する。日中全面戦争勃発後の1937年7月、北京の北京大学、清華大学、天津の南開大学は、南の湖南省・長沙に避難し、共同で“国立長沙臨時大学”を組成。3校の校長である蔣夢麟、梅貽琦、張伯苓が共同で学校業務にあたった。1937年12月13日、南京も日本軍に占領され、戦火が長沙に

迫ってくると、長沙臨時大学は安穩に授業を続けることが出来ず、1938年1月20日、更に雲南に移ることを正式に宣布した。2通りのルートで雲南入りすることを決定し、広州、香港、海防を経て昆明にいたるルートと、徒歩で陸路の険しい道を通って昆明に至るルートで、後者の場合、学生は湘黔滇旅行団（湘は湖南省の別称、黔は貴州省の別称、滇は雲南省の別称）を組成し、教師は自由3加であったが、社会活動家・革命家としても名高い学者・聞一多は当時長沙臨時大学の教師としてこの陸路徒歩コースに加わっている。1938年2月19日長沙を出発し、全行程1663キロを68日要して4月28日昆明にたどり着いている。国立長沙臨時大学はこうして1938年4月に雲南に移り、“西南連合大学”と改称し、1938年5月4日正式に開校した。しかし開校当初は、校舎が十分ではなく、理学院、工学院を昆明に、文学院、法商学院を暫時、雲南の東南部にある蒙自に置き（1学期後昆明に移る）、1938年8月には師範学院を増設した。全校で5院26系、2つの専修科などがあった。聞一多、吴晗、馮友蘭、朱自清、華羅庚などの著名な教授が教鞭をとり、民主氣運が盛んで愛国思想を広めた。1940年10月13日には昆明も日本軍に空襲され、1941年1月には、抗日民族統一戦線の下、華中の紅軍部隊が改編された国民革命軍新編第4軍（新4軍）を、国民党軍が裏切り包圍攻撃した皖南事件が起こった。そして抗日民主空氣が比較的活発であった西南連合大学も沈静化したかにみえたが、1944年には西南連合大学の民主氣運が復活し、様々な活動が活発化した。蒋介石の進める直接支配・中央化工作に抵抗を続けていた雲南地方軍閥の雲南省主席であった龍雲も、この西南連合大学にさまざまなルートで援助を行ったといわれ、抗日戦争期に昆明が民主運動の拠点になった。国民党の反共活動の強化による抗日民族統一戦線の破壊に反対する諸党派の民主同盟の昆明支部が1944年9月に結成されたが、その中心は、聞一多、羅隆基、李公朴など、西南連合大学の教授たちを含む学者・文化人であった。とくに西南連合大学の名を高めたのが、1945年12月1日起こった12・1事件。日中戦争終結後の1945年11月25日、西南連合大学の学生・教師が雲南大学などとともに挙行した反内戦時事報告会が国民党特務の攪乱破壊や軍隊の武装干渉に遭ったことから反内戦、民主革命闘争が展開され、1945年12月1日国民党当局が、西南連合大学などを攻撃し、学生など4名が殺害され、50名以上が傷害を受けた事件だ。抗日戦争終結後、1946年5月4日西南連合大学は解散し、3校は、北京、天津に戻り復校した。連合大学の各校が北に戻る際、“西南連大記念碑”を建て、この碑は、現在雲南師範大学の構内に残っている。

- (25) 趙喜順、1995年、「抗戰時期的四川社会学」、『西南民族学院学报：哲社版（成都）』、160ページ。
- (26) 中国社会学社、1948年、中国社会学社概況、中国社会学訊（中国社会学社20周年紀念暨第9届年会特刊）、第8期、p. 8。
- (27) 孫本文、1948年、復刊詞、社会学刊、第6卷合刊、中国社会学社。

#### 〔付記〕

本稿は、2004年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。記して感謝したい。

（ほし あきら 現代社会学科）  
2004年10月15日受理